

野鳥たより

—北海道—

ISSN 0910-2396

第 112 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成10年6月21日

オオヨシキリ



1996. 6. 25 米里 撮影者 小堀 煌 治

〒061-2283 札幌市南区藤野3条7丁目278



もくじ

柳沢信雄会長 御逝去・弔辞	俵 浩三	2
柳沢信雄先生を悼む	小堀 煌治	3
柳沢先生を偲んで	富川 徹	4
柳沢信雄元会長「北海道社会貢献賞（知事表彰）」受賞		5
「マガン北海道（静内町）越冬観察記録」		
	谷岡 隆	6
鳥民だより		11
平成9年度総会報告		12
探鳥会ほうこく		14
探鳥会あんない		16

柳沢信雄会長 御逝去

弔 辞

柳沢信雄さんのご霊前に謹んでお別れの言葉を申し上げます。

私をはじめ柳沢さんにお目にかかったのは、昭和40年代後半でした。その当時の私は北海道の自然保護課に勤務しておりました。ちょうどそのころ野鳥に興味をもつ方々が集まって「北海道野鳥愛護会」という組織を新しくつくり、その事務局が自然保護課にあった関係で、野鳥愛護会の中心的メンバーであられた柳沢さんも何回か道庁へ来られたの記憶しております。

その後、昭和50年代のはじめ私は野幌森林公園事務所へ転勤になり、数年間を野幌で過ごしました。しかし私が過ごしたのは、ほとんどウィークデーの昼間、建物のなかでの事務的な仕事でした。ところが、私が野幌にいない時間帯、すなわち土曜、日曜、あるいはウィークデーの早朝は、柳沢さんが奥様とともに野幌森林公園の中を野鳥の姿を求めて歩き回っておられたのです。ですから森林公園のなかの自然情報は、私たち役所の担当者より柳沢さんを中心とする野鳥愛護会の方々がはるかに詳しく、私も柳沢さんからずいぶんいろいろなことを教えていただきました。

その最もよい例が、北海道野幌森林公園事務所が発行した『野幌森林公園・森へのいざない』という案内書で

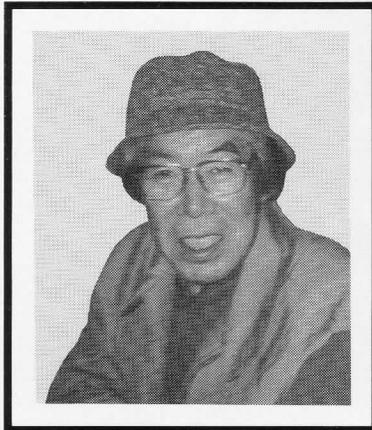
す。それには、いつの季節にはどんな野鳥が観察できるかを一目で分かるようにした表がついているのが特徴ですが、その表の最後に「藻岩小学校・柳沢信雄氏提供」と書かれています。

また、そのころ野幌森林公園内で天然記念物クマゲラの営巣が確認されましたが、その生態を静かに観察し、詳細な記録をまとめられたのも柳沢さんを中心とするグループでした。その後、柳沢さんは「野幌森林公園を守る会」を組織し毎年クマゲラの継続

的な観察を行うようになりました。それはいまでもつづいているようですが、今年の定例観察では残念ながらクマゲラの姿を確認できなかったと聞いております。ことによると柳沢さんが病気になられたことをクマゲラが知り、悲しんで姿を見せなかったのかもしれませんが。

柳沢さんはいつも笑顔を絶やさない温厚な方ですが、クマゲラの営巣する大木が伐採されそうになったときは、本当にこわい顔をして怒ったので、柳沢さんの自然保護に対する

情熱の一端をかいま見る思いがしました。柳沢さんは北海道における自然保護活動のパイオニアのひとりで、多くの人々に自然の大切さや野鳥観察の魅力を教え、また自然観察指導員などの後継者を育ててきました。とくにこの10年ほど北海道野鳥愛護会の会長としての重責を果たしてこられました。これらの功績はけっして忘れられることがないでしょう。



昭和50年代の後半からの私は公務員を退職し、短期大学に勤めるようになりましたので、社会奉仕のひとつとして北海道自然保護協会の仕事を手伝うようになりました。この北海道自然保護協会の仕事を通じて、柳沢さんにはずいぶんお世話になりました。とくに昭和63年から平成3年までは柳沢さんは理事として活躍してくださいました。またこの三、四年は北海道自然保護協会の総会で議長を勤めていただきました。自然保護には多様な価値観と考え方がありますので、総会での舵取りはむずかしいのですが、柳沢さんは、公平的確に議事をさばってくださいました。

今年も5月には総会がありますので、また柳沢さんに議長をお願いしたいけれど、今年は入院をされていると伺ったので、近いうちにお見舞いしなければならぬ、と思っておりました。それなのに、こんなに早く柳沢さんが亡くなったという報せをいただくとは、夢にも思っていないませんでした。

この数年の柳沢さんは北海道の野鳥のためだけでなく、

中国との国際親善の一環として中国で野鳥の調査や保護指導にあたり、また遠くガラパゴス諸島やオーストラリアに調査にでかけられたと伺っています。

このごろの日本では高齢化がすすみ、平均寿命が延びております。柳沢さんは、その平均寿命かという、まだまだお若い69歳だったとのこと。もっともっと、北海道の野鳥のため、世界の自然環境のために、お力を尽くしていただきたかった、と私たちは残念に思いますが、おそらく柳沢さんご自身も、それが心残りだったのではないのでしょうか。私たち後につづく者は、柳沢さんが果たせなかった思いの何分の一かでも充たせるように頑張ってみようと思います。

柳沢さん、これからは天国から、北海道の、そして世界の、野鳥や自然を見守っていただくことができるよう、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

平成10年3月31日

(社)北海道自然保護協会 会長 俵 浩三

柳沢信雄先生を悼む

副会長 小堀 煌 治

今年の4月、陽炎が立つ早春の石狩平野を、枯れ草に止まるノビタキに目をやり、ヒバリのさえずりを聞きながら宮島沼探鳥会に向かっていた。行く手に石狩川の堤防が見えてくると、なにか胸にこみあげてくるものがあった。もう3～4年前になるだろうか。その時も今年と同じような暖かい日だった。何人かで宮島沼に行き、マガンやハクチョウを堪能しての帰途、僕の車には柳沢先生が乗っていた。「この辺でお昼にしよう」と、堤防の枯れ草に腰を下ろし、春の陽光の中でヒバリのさえずりを聞きながら弁当をひろげ、もう何を話したのかすっかり忘れてしまったが、ノンビリと過ごしたことがあった。そんな事を思い出しながら、宮島沼に到着した。これからも、千歳で鶴川で野幌で、色々な場面が蘇ってくるだろうと思う。

先生とご一緒させていただいてから30年近く経つのではないだろうか。あの頃、先生達野鳥愛護会のベテランはいわゆる「百武学校」の生徒で、百武さんをリーダーにして探鳥を重ねていた。僕は初心者で最下級生、まだ生徒として入学も許可されていないような存在で、皆さんの後で勉強申だった。

探鳥会での先生はいつも控え目で、鳥の講釈をするわけでもなく、ニコニコと冗談を言いながら皆の中にいた。

もちろん質問されると、鳥の事でも植物の事でも懇切丁寧に答えておられた。珍鳥発見！で皆が興奮している時にも慌てず騒がず、「珍鳥だけが鳥ではないよ」とばかり、冷静で、出現した鳥は一種も見逃さず観察していた。鳥合わせが終り、幹事が最後に「他に見た鳥はありませんか」と確認すると、先生がポツリ「スズメとドバトもいたよ」と付け加える。そんな場面を何度か目にした記憶がある。

昨年の事を思い返してみると、どうも先生はご自分の運命を予感していたような気がしてならない。8月に十五島公園で豊平川の水棲昆虫の観察会があった。観察会は昼頃には終り、先生はそのままバスで帰るだろうと思っていると、急に「白鳥園のばあちゃんに会っていく」と言い出して、一緒に小沢さんにお邪魔した。おばあちゃんは喜んでくれ、「先生が来て酒を出さないと亡くなったじいちゃんに叱られる」と一升瓶を出してきた。酒を飲みながら亡くなった小沢広記さんの思い出話。白鳥園での探鳥会の話などに花を咲かせ、赤い顔をした2人が盛夏の昼下がりにバス停に向かった。

10月のオーストラリア探鳥旅行の時も、僕は行きたい気持ちは充分にあったのだが、休暇を取らなければならないし、直前まで迷っていた。この時にも先生にしては

珍しく強引に、「あなたは初めから人数に入っていたんだから、行かないとだめだよ」とハッパをかけられて、ようやく決心がついた。この時、すでに先生の体に病魔が巣くっていたのでしょう。オーストラリアでは咳込みがひどく、食欲もなく、ホテルに帰って酒を飲んでいつもの粘りが無い。炎天下の探鳥では、途中で「おれはここで待っているから皆は行っておいで」と1人、道端で休んでいた。しかし、ホテルに帰ると、鳥合わせだけは欠かさなかった。皆を先生の部屋に集め、英文の図鑑を見ながら悪戦苦闘して深夜に及んだこともあった。

先生にとって11月のウトナイ探鳥会が最後の探鳥会になってしまった。無理ではないだろうか、気にしながら誘いの電話をすると「行きたい」という。助手席の先生は咳込みがひどく、会話も中断しがちだった。探鳥会が終り、僕はその日の探鳥会の目玉ハジロクロハラアジサシの撮影に夢中になっていた。背後で先生の声がして「僕は井上さんの車で先に帰るから」という。珍しい事だと思った。いつもは何かあっても二日酔いでひどい状態でも探鳥会には必ず顔を見せ、最後まで頑張っているのが、いつもの先生だった。体が本当につらいのに無理をしての参加だったのだろう。

普段の先生は温厚で、考え方の幅も広く、鳥を含めた

いくつもの自然保護団体に参加していた。どの団体でも、まとめ役として貴重な存在だった。他人にはあまり厳しいことは言わなかったが、何でもオーケーという人ではなかった。特に厳しかったのは、野鳥愛護会など本来ボランティアの活動では「自分で発案したことは、自分で実行しなさい」ということで、探鳥会でもリーダーの説明を聞くのもいいが、「自分で図鑑を広げ、自分の目で確かめなさい」と。つまり、人に頼らず自分でできる事は自分でやりなさいという事を、言外に漂わせながら発言していたように思う。それが時には厳しい口調になるので、誤解を受けることもあったが、あえて弁解せず、先生はそれを垂範率先していたように思う。

また、先生は一日一日を精一杯生きていた。泊まりがけの探鳥会の時など、普通の人は「明日は早いから、今夜は早く寝る」などと考えるものだが、先生はどんなに遅くなくても、鳥合わせをきちんとやり、その後は参加者との出会いを大事にし、酒をのみながら談論風発、徹底的に付き合い、時には深夜から早朝に及ぶこともあったが、翌朝は平然と早朝探鳥会に顔を見せていた。

先生の生涯は決して長くはなかったが、70年の生涯を密度濃く終えられたように思う。

柳沢先生を偲んで

富川 徹

我が家の横をリュック背負って通り過ぎようとする先生の姿を見て、子どもたちは「あっ、お父さん、柳沢先生がいくよ！」と教えてくれる。「今日は歩きましょうの会だよ」。窓越しに「おはよう、こんにちわ！」というように、笑顔で小さく手を振りながら合図して、大沢口へと急ぐように歩いていく姿が、今も思い浮かぶ。野幌の探鳥会を、特別楽しみにしていた先生である。

野幌は、先生の野鳥や自然と触れる最大のフィールドワークであったと同時に、最も大切に保護したい地域であることには違いない。先生は、野幌森林公園を守る会の発足（昭和58年）から事務局長となり、その後すぐ会長になり、今日まで努められていた。当初は大径木が切られる問題から、この森を守るために積極的に活動を推進させてきたが、野幌をとりまく開発の余波は押し止まず、これまで、野幌横断道路計画、江別RTN構想、犬ぞりレース、スキーマラソン、野外音楽会、立命館慶祥高校開校、休養園地整備計画、札幌厚別下野幌市街化区域計画など、多くの問題について、野幌の野鳥や自然を

保護するために、真っ向から取り組み、それらのあり方について常にリーダーシップをとってこられた。野鳥愛護会の代表的探鳥地である野幌森林公園を、これからも大切に保護、保全していく方向は、受け継がねばならないと思う。



在りし日の柳沢会長
(苫小牧植苗探鳥会で。右端)

先生は、探鳥地についても、東米里や福移などをあげて「見られる鳥の種類が少なくなったから探鳥地として選ばないということではなく、観察を続けて野鳥や環境がどう変わってきたか考えることが大切」と幹事会などでよくお話されていた。

鵜川河口では、浸食による海岸後退に加えて、生活排水路工事に伴って干潟環境が消失し、シギ・チドリが減



ノゴマ

少していることを危惧されており、何とかそれら野鳥の集まる環境を維持できないものかと、役場を通じて関係各所にもお願いもされてきた。そうした中、「我々は1羽も見られなくなるまで探鳥会を続けたい」を口癖のように、何度となくその存続の危機を乗り越えてきたことは事実であろう。昨今、鵜川では地元の自然愛好者らが手を組んで観察会や講演会などを行い、干潟の鵜川を復元するための活動が見られてきたが、これも先生の貢献によるところがあったといえよう。

先生は、日頃から豊かな野鳥や自然を守り、それが豊かな地域社会につながってくれることを望んでおられた。

先生は、「小学校の先生」であられたが、私においては「師匠」であった。野鳥や自然の話は数限りなく教わったが、その他「社会・人・教育・もの・こと」などの有りとあらゆることにおける教師であり、公私ともに、恩恵は多大なものがある。

家族共々親しみのあった先生の思い出は、私の脳裏から消えることなく、語りたことはまだまだあるが、あらためて、ここに先生のご冥福をお祈りいたします。先生、長い間ほんとうにありがとうございました。深く感謝申し上げます。合掌

柳沢信雄元会長「北海道社会貢献賞（知事表彰）」受賞

北海道では、昭和46年度から自然保護や野生鳥獣の保護に功績のあった人に対し、毎年5名以内で、知事表彰を行っております。

このたび、柳沢信雄元会長の長年にわたる野鳥愛護活動を通じた愛鳥思想の普及と高揚に、特段の貢献があったことから、野生鳥獣保護功労者として、バードウィーク期間中の5月11日(月)に表彰状が、遺族に贈呈されました。

札幌市内では、過去に2個人、2団体が受賞しており、個人では、3人目の受賞になります。故人が受賞したのは初めてとのことであり、これまでの野鳥愛護・保護実践活動の功績が大きかったことから認められたのではないかと考えております。生前に受賞されておられれば、さぞ喜ばれたのではないかと思います、誠に残念でなりません。

(白澤昌彦代表幹事)



オオジュリン

「マガン北海道（静内町）越冬観察記録」

谷岡 隆

●はじめに

平成7年2月5日、この年の北帰行第一団と思われるマガン27羽が、何の前触れもなく静内町神森地区に渡来、3月9日までの間、渡りの中継点として一冬を過ごした。そして、平成7年12月22日～平成8年3月24日までの93日間、天然記念物・マガン41羽とヒシクイ1羽の計42羽が北海道静内町で初めて越冬した。

但し、越冬数は日々変わり、初め42羽であったものが、36羽に減少し最後は30羽となり、群れが3月9日以降、変化していったのは興味深い。

次なる関心事は越冬2シーズン目に継続するかであったが、平成8年12月29日、マガン28羽が1シーズン目と同じ神森地区に渡来し越冬。これとは別行動マガン幼鳥2羽も1月15日～4月25日の間、町内田原地区で越冬した。

2シーズン目の特徴は、前年と比較し個体数、行動パターンが大きく異なり、28羽は前年越冬地・神森地区には定着せず、神森地区での確認は12月29日～1月5日、2月1日～12日、2月22日～23日と間隔があき、僅か22日間にとどまった。

一方、この群れとは別に幼鳥2羽が、神森地区から6km離れた田原地区で、競走馬の放牧地を採食地とし、1月15日～4月25日までの101日もの長期間にわたり半径500mの小さな行動範囲の中で越冬した。

幼鳥2羽の行動は28羽の群れとは別行動で、2月22日に一度合流した以外は、一度も行動を共にはせず、行動範囲も田原地区の牧場と静内川河川敷地間500mを往來するという独自の行動を続け、田原地区で初めての越冬記録ともなった。

結果的には、越冬数は前年の越冬数42羽より12羽少ない30羽となり、採食地も前年地を大幅に変えるなど、越冬の行動や生息パターンも前シーズンとは大きく異なったものの、マガンが静内町に2シーズン目も越冬した。

3シーズン目は、神森地区には不定期に渡来するのみで、従来の採食地・神森地区を中心としたマガン群れの日撃は僅かに14日間にとどまった。

越冬地としては不適當と判断したのか、継続する形では確認出来ずに残念なシーズンとなったが、これまで未確認であった“ねぐら”を、推定箇所であった静内川中洲で発見した。

●観察

“観察こそ野鳥保護の原点”。そしてデータは積み重ねてこそ意味を成す。

静内でのマガン越冬については、越冬前年から継続して観察する機会を得、何よりの幸運と思っている。

特に越冬初シーズンは、日の出から日没までのフルタイム観察を10日間も観察する事が出来た。その後、年々、見たくてもなかなか姿を現さない現況を考えると、余計にその感が強いが、今回は紙面の都合で、日々詳細な観測記録を掲載出来ないのが残念。

●越冬期間・個体数

★1シーズン目

平成7年12月22日～平成8年3月24日（93日間）／42羽（マガン41羽・ヒシクイ1羽）

○平成7年12月22日～平成8年3月9日／42羽（マガン41羽、ヒシクイ1羽）

○平成8年3月10日～平成8年3月22日／36羽（マガン35羽、ヒシクイ1羽）

○平成8年3月23日～平成8年3月24日／30羽（マガン29羽、ヒシクイ1羽）

★2シーズン目

平成8年12月29日～平成9年4月25日（118日間）／30羽（マガン成鳥20羽・幼鳥10羽）

○平成8年12月29日～平成9年2月23日、3月16日（23日間）／28羽（成鳥20羽・幼鳥8羽）

○平成9年1月15日～平成9年4月25日（101日間）／2羽（幼鳥）

*28羽と2羽は、2月22日以外は別行動

★3シーズン目

平成10年1月6日～平成10年2月22日（48日間）／30羽（マガン成鳥・幼鳥識別不明）

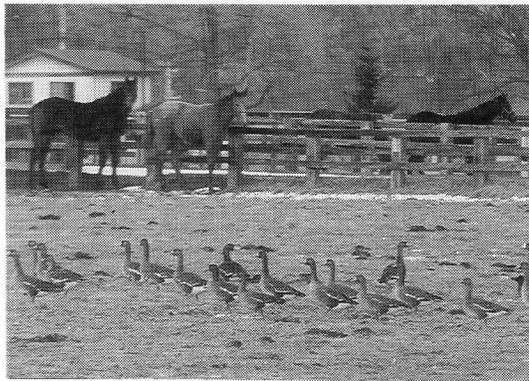
●ねぐら

ここ数年間、日没後の暗闇の中をマガンたちがねぐらと思われる静内川上流方向へと飛んで行く光景を見続けてきたが、飛んで行く方向、距離等から判断し、田原地区周辺の静内川中流部の中洲と推定していたが、静内にマガンが渡来して4年目となる平成10年2月21日、遂にねぐらを発見した。

場所は従来からの推定箇所であった静内川の中洲（田原地区）で、辺り一面、砂利原でシンプルな地形。群れ

だけでなく新しい糞などの証拠物も発見したが、特徴的な事は次のとおり。

- ①このねぐらは、3年前にある程度マークしていた所で、日没後、この地点に着陸するのを確認しているが、当時はねぐらとして断定する以前に、それがねぐらとし



牧場に降りたマガン

- て降りたのか、暗くて見失ったのかが判別せず、そのままになっていた地点である。
- ②ねぐらの面積は、想像以上に狭く、20m四方以内。
- ③唯一の証し、糞を探すがかなり古い物もあり、ここが今シーズンねぐらとして使用されていた事が裏付けされるが、今シーズンをフルに使用したとしては、糞の数量が足りないようにも思える。
- ④キタキツネのねぐらが近辺にあり、ねぐら付近にも随分とキタキツネの新しい足跡も結構ある。そんな意味では環境が優れていると言いが、直ぐ近くの対岸にも河原が有り避難する事が出来るため、それなりに条件が整っている。
- ⑤河原ではあるが、兩岸に柳が密生しており、最低限、風の影響を受けづらく、防風林の役目を果たしている。
- ⑥辺りは見晴らしが良く、天敵などから身を守るためのロケーションに優れている。

●採食地

★1シーズン目

採食地は、別紙の“採食地一覧表”、別図の“マガン採食場所”のとおり、静内町内の神森地区及び中野町4丁目に限定されており、距離的には直径2km範囲内であるA～Rの18箇所（時には、静内川中洲で水を飲む）となった。

1月、2月、3月と少しずつではあるが移動する。期間的には4～5日、或いは1週間程度で微移動し、2月中旬から採食地を活発に移動する。しかし、一日の中でベースとなる場所が決まっており、その日決めた場所を中心とし、群れが行動する。

★2シーズン目

採食地は、28羽の群れは神森地区、2羽幼鳥は田原地区と異なるが、いずれも静内町内である。また、28羽の採食地は、昨年と比較し同じ神森地区ではありながら同一ではなかった。

○28羽～ほとんどが前年と同じ神森地区ではあるが、半径2km以内で18か所（A地点～R地点）と、さほど広くはない昨年の採食場所を今シーズンも利用したのは、僅か6か所（A・B・E・M・Q・R地点）に過ぎず、利用率は33%と低い。新規に採食地として利用したのは、S・T・U・V・W・X地点の6か所となり、今年と昨年の採食地を合わせると12か所になる。しかし、その行動範囲は以外と小さく僅かに半径1.4km以内である。

○幼鳥2羽～初めての越冬地で、しかも101日間の長い越冬期間にもかかわらず、田原地区・牧草地と300m～500m離れた静内川中洲の二か所でしか確認されておらず、土地への執着心が強いマガンの習性をよく表している。

★3シーズン目

これまで、2シーズン越冬の拠点としてきた静内町神森地区での採食行動を確認出来たのは、昨シーズンまでと比較すると比較にならないほど減少した。確認出来たのは全て水田である。

今シーズンは他の場所に採食地を求めたと思われ、目撃情報をまとめると、静内町外（新冠町・門別町）の可能性が高い。しかし、ねぐらは今シーズンも静内川と思われる。

★紙面の都合で、採食地図は不掲載。

●採食物

★1シーズン目

○平成7年12月22日～平成8年2月29日／草系～牧草（新芽）。

○平成8年3月1日～平成8年3月24日／米系～稲藁、落ち穂。

*採食物は12月～2月が牧草。3月に入ると稲藁・落ち穂等の米系統に移行する。これは、渡り時期に必要なカロリーと関係し、渡りが近くなるとカロリーの高い米系統を食する。

*水分補給は、餌のそばにある雪を食する場合がほとんどであるが、静内川の中洲に降りて川の水を飲む時もある。観察した範囲では、一日に一回は静内川で水分補給をしていると考えられる。

★2シーズン目

○28羽ファミリー、2羽幼鳥とも、今シーズンの採食地は、ほとんどが競走馬の飼育に関連する草地、採

草地、放牧地などの“牧草”であった。

○28羽については、観察期間が少なかつたせいもあるが、水田での採食観察例は、3月16日、ただ一日だけである。

○2羽の幼鳥については、水田においての観察が一度もない。

★3シーズン目

数少ない確認例ではあるが、採食物は全て水田畔道の草である。

●地球温暖化

マガンの国内最大の越冬地“伊豆沼”が一局集中の形となっており、物理的に飽和状態であるとされている。ならば、新天地を求め北海道で越冬しても不思議ではないと考えられるが、低い気温、ねぐらとなる河川や湖沼の結氷、生息には不可欠な草・米等、餌の確保が困難であるなど、生息条件が厳しい事から、マガンの越冬には不適とされ、誰もが予想だにしなかった。

しかし、北海道越冬3シーズンは現実のものとなった。では、どうしてマガンが越冬するようになったのか、一番有力なのは「地球温暖化」説。

マガンは、1940年代には推定50,000羽以上が生息していたにもかかわらず、以後、国内での生息環境の悪化などが原因で、年々、個体数は減少していった。

10数年前から増加現象が始まり、越冬地の北限とされる宮城県北部・伊豆沼での越冬数が、1970年代は3,000~4,000羽台であったものが、1985年冬に10,000羽を越えたあたりから増加に拍車がかかり、1990年以降は20,000~30,000羽。そして1996年には、ついに50,000羽前後まで数えるに至った。

これは、地球の温暖化により繁殖地である北極圏の平均気温が上がり、営巣や餌の確保が容易になった事に起因し、その結果、渡来数も増加したものと考えられ、国内の越冬地も年々北上を続けている。

例えば、伊豆沼より北に位置し、これまでは一つの中継地であった秋田県小友沼では、1990年代以降、マガンが越冬するようになり、北海道でも1995年からは、日高支庁管内・静内町で越冬するようになった。環境の変化に敏感な野鳥であるマガンがいち早く、環境変化に呼応した結果と考えられている。

この事例は、平成9年(1997)12月1日~11日、京都市で開催された「地球温暖化防止京都会議」に於て、12月3日、日本野鳥の会とイギリスのバードライフ・インターナショナルが主催するワークショップの席上、温暖化が野生生物に与えている影響の日本唯一の事例として、秋田県小友沼の越冬例とともに報告された。

ともすればマガンの静内町での越冬に関する観察記録

が“北海道越冬”のデータとして活用され、静内町でのマガンの越冬が国内のみならず、世界中が環境問題の事例として、注目する結果となった事は、観察をする者としては何よりの励みとなった。

●満たす越冬条件

越冬には“採食地”と“ねぐら”の二つの条件が必要であるが、静内町が位置する日高中部地区は、太平洋に面する海洋性気候の影響で、日高支庁管内でも最も降雪量が少なく、気候も温暖であり餌となる牧草の採食が十分可能である。また、ねぐらは、湖や沼はないが、冬期間でも結氷しない2級河川・静内川があり、白鳥たちがねぐらとするのと同様に、河岸、中洲を利用している。

●越冬中の行動

★1シーズン目

○基本パターン

早朝の日の出と共に、静内川のねぐらから採食地の神森地区へと向かい、一日中、採食行動をし、日没と同時にねぐらへと帰る。一日の行動は、群れ全体での統一行動である。ねぐらと採食地との距離は数キロ程度と推定される。

○飛翔コース

*ねぐらへ帰る飛翔コースは、東方向の静内川へと真っ直ぐ向かい、静内川の上空まで到達すると、川沿いに上流方向へと向かう。

*2月中旬を過ぎると、群れが上空へと舞い上がるケースが多くなる。飛翔時間は、長い時で30分にも及ぶ時もあるが、大半は10分程度で地上へと戻る。その際のコースは、ねぐらと同様に真っ直ぐ静内川へと向かい、そこから上流部、下流部と川の流れて沿って市街地や田原地区などの上空を飛ぶ。

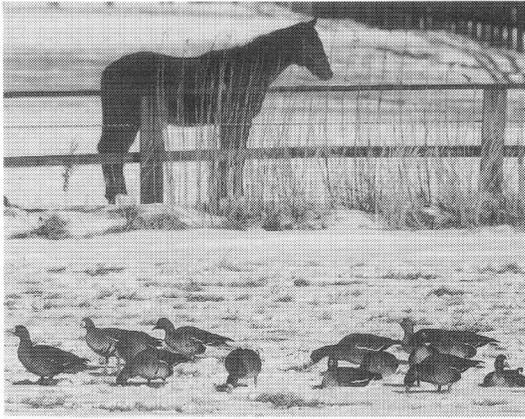
*ねぐらへ向かうコースは一定しているが。早朝(夜明け)に採食地へと向かうコースは不明で、田原の陸地上空を飛翔すると思われる。(早朝時、何度か堤防沿いで群れを待ち伏せしたが、残念ながら確認できず)

★2シーズン目

○基本パターン

*今シーズンは、前年と比較して28羽の行動が落ち着いていなかったため、観察日が少なく、まとまったデータが収集できなかった。しかし、日の出と共に静内川のねぐらから採食地である神森地区へ移動、一日の大半を採食活動に費やし、日没と同時にねぐらへと帰っていくといった群れ全体の行動は、昨年と変わっていない。

*28羽は、非常に警戒心が強く、カラスが鳴くだけで警戒ポーズをとるなど、少々の物音や動きにも敏感



牧場で採餌するマガンの群れ

に反応していた。これは飼い犬の放し飼いなどが原因による危険行為を幾度か体験したためと推察される。

- * 28羽の群れの内、1羽が右足を怪我しており、歩行時に片足を引きずり、皆と一緒に行動が出来ないため、いつも1羽だけ別行動をとる事が多かった。しかし、飛行には関係がないため、空中での移動は問題なかった。
- * 2羽幼鳥は、いつも別行動であったが、数日間は28羽の群れと同一行動をとったと思われる。しかし、越冬日が28羽は2月23日までの22日間であるのに対し、2羽の幼鳥は4月25日までの101日間と大きく異なり、不可解で興味深い結果となった。
- * 2羽とも嘴の先端が黒ずんでおり、これは幼鳥期の特徴の一つで、発育状態が良くない症状の一つである。幼鳥については、なぜ2羽で別行動なのかなど、越冬パターンの意味合いがよく分からないにしても、新しい越冬地が一箇所増えた。
- * 2羽の日周行動は、シーズン中ほとんど同じであった。日の出と同時に牧草地に飛来、一日の大半を採食活動に費やし、牧草地に不在時は500m離れた静内川中洲に降り、水を飲み、背眠や休息、羽繕いなどを繰り返し、かなりの時間帯をそこで確認、この場所が余程、気に入ったものと思われる。日没と同時にねぐらへと戻る行動は28羽と同様。

○採食

- * 前年同様、早朝時はまどろみが続くも、9時頃から活発な採食活動に入り、お昼頃に少々背眠をするなどの休息をとり、午後から再び旺盛な採食を続ける。
- * 28羽は、今シーズンの採食物はほとんどが牧草であったが、昨年同様3月に入った3月16日には、豊畑地区水田で落ち穂を食しているのが確認されている。しかし、今年の群れと大きく違って、越冬日が異なる

ため、比較対象とならないと思う。

- * 2羽については、4月25日まで越冬したにもかかわらず、採食物が米へと移行せずにシーズン中は始終、牧草であった。

○日周行動

- * 神森地区での目撃例は、1月16日以降は早朝と夕方であり、特に午前中と午後3時以降に集中している。これらをまとめると、次のようになる
- * ねぐらの静内川（田原の中洲）から夜明けと同時に飛び立ち、神森地区上空を通過し、そのまま市街地方面まで飛行。そこから右方向へ飛行ルートを変更し、新冠町に向かい、水田か牧草地で採食する。
- * 午後3時以降になると、静内町方向へと向かい、時折、今までの採食地であった神森地区に降りたり、上空を通過し、ねぐらである田原地区へと向かう。

★3シーズン目

○基本パターン

- * 今シーズンは、神森地区を越冬地としては不適当と判断したのか、時折、不定期に渡来するのみで、継続した形で姿を確認出来ずに残念なシーズンとなった
- * 原因としては、人間、飼犬等の幾度かのマガンへの危険行為が考えられるが、断定は出来ない。しかし、神森地区に代わる採食地については、マガンの土地への執着心が極めて強い特性から、静内町内或いは近隣の町の何処かで越冬している事と推察出来るが、何処かは不明である。

○採食地

- * これまで、2シーズン越冬の拠点としてきた静内町神森地区では、今シーズン減多に群れを確認する事が出来なく、今シーズンは他の場所に採食地を求めたと思われる。マガンにしてみれば、数キロ或いは数十キロの移動範囲は、翼を広げれば簡単な事。
- * 何処に新天地を求めたか。目撃例から推察すると静内町の隣町である新冠町方向からの飛行が幾度か目撃されており、可能性十分である。しかし、唯一の河川である新冠川は年末からの寒さで1月中などは結氷しており、この地での採食、ねぐらの可能性は無いと思われる。

○日周行動

- * 神森地区での目撃例は、1月16日以降は早朝と夕方であり、特に午前中と午後3時以降に集中している。
- * ねぐらの静内川（田原の中洲）から夜明けと同時に飛び立ち、神森地区上空を通過し、そのまま市街地方面まで飛行。そこから右方向へ飛行ルートを変更し、新冠町に向かい、水田か牧草地で採食するとと思われる。

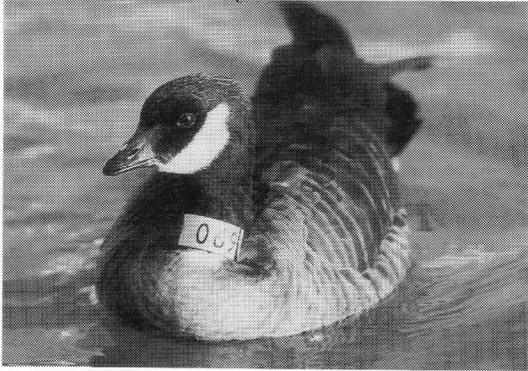
*午後3時以降になると、静内町方向へと向かい、時折、今までの採食地であった神森地区に降りたり、上空を通過し、ねぐらである田原地区へと向かう。

●シジュウカラガン

3シーズン目にマガン渡来日と同じ平成10年1月6日、標識シジュウカラガン(069)1羽が静内町に飛来、3月24日までの78日間、静内川河口域で越冬した。

このシジュウカラガンは、平成9年8月1日、ロシア・エカルマ島(千島列島)で人工繁殖し放鳥された33羽の1羽であり、他に3羽が3月1日まで、宮城県の伊豆沼近辺で確認されている。

同一日の確認ゆえ、マガンの群れと同一行動で静内町



標識 シジュウカラガン (069)

に渡来した可能性もあるが、その後の行動が別々であるなど、その因果関係の立証は難しく、偶然、マガンの渡来日と重なったとも考えられる。

静内町への渡来ルートは不明であるが、越冬中、マガンとは越冬の同一行動をとらず、1月中はオオハクチョウ8羽(成鳥2・幼鳥6羽)のファミリーと同一行動をし、特にオオハクチョウ成鳥2羽がシジュウカラガンの親代わりをし、2月以降は単独行動をとるようになった。

昭和62年(1987)4月、浜頓別町クッチャロ湖でシジュウカラガン(標識鳥-007)1羽が、コハクチョウと絶えず行動を共にし親代わりをしていた事例が観察されたが、今回とは逆のケース。

なお、シジュウカラガンの越冬は、毎日観察データもあるが、別に機会に発表したい。

●新たな行動

静内町で今シーズン初認した1月6日の前日となる1月5日・15時頃に38羽を確認したのを始めとし、平成9年12月19日・38羽、12月23日・32羽、12月25日・30羽。それぞれマガンの群れが静内町から約90km離れた苫小牧市植苗地区(デントコーン畑、牧草地)で、ウトナイ湖サンクチュアリ・レンジャーがマガンの群れを確認した。

これだけの数が12月～1月にかけてウトナイ湖で確認されたのは初めてである。

これまで静内町で越冬するマガンの渡りのルートがペールに包まれたままであったが、直前の渡来地としての一部として、同じ群れと考えられる可能性が非常に強く、今後、越冬ルートとしての可能性もあり、興味深い。

●総括

まだ、マガン越冬物語が終了した訳ではなく、結論めいたものは何一つないが、4シーズン(内、3シーズン越冬)を総括すると、一応幾つかの顔が見えてくる。

①マガンの土地への強い執着心、採食地も例年とほぼ同一場所であることを考えると、静内町に渡来する群れの主要メンバーは4シーズン共、同じであると考えられる。

②個体数、群れ構成、越冬時期、越冬期間、採食地、日周行動、渡りルートなどが、1シーズン毎に少しずつ変化している。

③4シーズン中、変化がないのはねぐらと牧草を主とした採食地で、二つに共通しているのは、越冬には欠かす事が出来ない2条件であるという事が浮き彫りにされて面白い。

*特に②に代表される変化の一つ一つが、一体何を意味するかを、把握出来かねるもどかしさはあるが、興味深い事象であり、今後の観察結果を経なければ現時点では、残念ながら分からない。

●「GEESE(雁)展」

幾多の渡来地から静内を選んでくれた天然記念物・雁たちへの敬意もあるが、日高と関わりを持つようになった鳥たちを、地域に住む者として、一人でも多くの人への理解、人と雁“共存”をコンセプトに、平成10年4月10日～30日の3週間、静内町公民館・町民ギャラリーを会場として“「GEESE(雁)の世界」へようこそ”を4部構成により開催した。

○第1部・写真展

マガン、ヒシクイ、オオヒシクイ、コクガン、シジュウカラガン、サカツラガン、ハクガンの7種写真13枚。

○第2部・報道資料展

昭和62年以降、マガン、オオヒシクイ、シジュウカラガンなど、ガン類についての新聞報道を主とした報道・出版物展。

○第3部・観察記録

平成8年～平成10年の3年間、静内町を主とした雁たちの5種類の観察記録を公開展示。「マガン北海道初越冬観察記録」「マガン北海道2シーズン目越冬観察記録」「マガン北海道3シーズン目越冬観察記録」「オ

オヒシクイ北海道日高初渡来観察記録「標識シジュウカラガン(069)北海道初越冬観察記録」

○第4部・パネル展

「日本雁を保護する会」製作の“ガンの生態”を分かりやすく解説したパネル8枚を展示。

*単独開催で、多少、労力と経費を要したが、新聞でも大きく取り上げられ、NHK(ラジオ)にも生放送出演し、思った以上の反響と幸運に感謝している。また、このささやかな催しが、雁たちの保護に少しでも役に立ったのであれば、幸いであるし、そう願っている。

(1998. 4. 26)

〒056-0019 静内郡静内町中野町2丁目6番38号

石狩市でアカアシシギ

根室では少数が繁殖しているが、北海道の他地域では渡りの時期にまれにしか見られないアカアシシギが、1998年4月の初めに、石狩市生振で数人の愛護会会員によって観察された。茨戸川にかかる茨戸大橋近くの雪解け水がたまった田んぼで、成鳥夏羽1羽が4月2日から4日までの3日間、採餌と休息をしていたとのことである。

石狩方面では珍しい鳥であって、観察者の一人が持ちあわせたカメラで撮影した。遠かったために鮮明な写真は撮れなかったが、ムクドリ(写真手前)の群れから少し離れて、ミミズをさかんに食べていたのを全員でじっくりと観察できたそうである。

根室以外に、北海道の太平洋側では観察記録がいくつかあるが、石狩のような日本海側では殆どなく、大切な記録の一つと言える。

(広報担当)



アカアシシギ(片山 實氏撮影)

オオタカの分布と生態調査記録の追記と訂正

山田 良造

前号(平成10年3月21日)でみだしのことを報告したが、その後、日本野鳥の会研究センター・日本オオタカネットワークから追記の資料の送付があり、又、観察記録の中で、訂正箇所は次のとおりです。

1. 追記

全国のオオタカ分布(1993~1996年)
(1995・1996年度アンケート資料から)
生息確認市町村数 791
繁殖確認市町村数 205
確認営巣地数 225
(北海道は前号記載と同じ)

2. 訂正

オオタカの生態調査記録の中で、11頁14行目で、55分ぐらいは5分ぐらいです。

鳥民だより

会員名簿 (平成10年5月31日現在)

【新しく会員になられた方】

- 鈴木 繁雄 ☎063-0861 ☎641-0884
- 英子 札幌市西区八軒1条東2丁目2-35-606
- 西永 之恵 ☎060-0005 ☎261-7527
札幌市中央区北5条西10丁目3-1-414
- 橋本志津子 ☎004-0004
札幌市厚別区厚別東4条8丁目6-7
- 佐々木潤子 ☎065-0025 ☎783-9492
札幌市東区北25条東20丁目1-5-202
- 勝俣 征成 ☎004-0867
由美子 札幌市清田区北野7条5丁目2-7
- 斉藤 正雄 ☎004-0041
郁子 札幌市厚別区大谷地東6条2丁目8-308
- 井川 修二 ☎065-0033 ☎753-3832
札幌市東区北33条東14丁目7-1-705
- 屋代 育夫 ☎063-0826 ☎661-7385
札幌市西区発寒6条14丁目107
- 川上 秀幸 ☎003-0875 ☎871-1506
札幌市白石区米里2221-14
- 北山 政人 ☎063-0821 ☎642-0177
札幌市西区二十四軒2条6丁目1-31

平成9年度総会報告

日 時：平成10年4月18日(土) 午後1時30分～4時30分
場 所：札幌市民会館 第9号会議室

小堀副会長の挨拶のあと、議長に小堀氏を選出し、議案審議が行われ、原案どおり承認可決された。

<議 事>

1. 平成9年度事業報告

[総 務]

- (1) 野鳥写真展の開催
カメラの光映堂フォトギャラリー「ウェスト・フォー」
(9.4.29～5.15、18名、34点)
- (2) 野鳥だよりの発送(108号～111号)
- (3) 新年野鳥講演会、スライド映写会の開催
講 師 小山心平氏「シマアオジの話」
於：札幌市女性センター(10.1.10(土))
参加者63名
- (4) 愛護会名入りカレンダーの作製 100部
(1部1,000円)
- (5) 定例幹事会の開催(原則として毎月第1水曜日)
- (6) 傷害保険の更新(探鳥会20回分)

[広 報]

『野鳥だより』108、109、110、111号の発行

[探 鳥]

探鳥会20回。参加者累計672名。

「野幌森林公園を歩きましょう」開催8回。参加者累計151名。

[会 計]

- (1) 平成9年度決算報告
- (2) 平成9年度会計監査報告。大野信明監事から適正に処理されている旨の報告があった。

2. 平成10年度事業計画

[総 務]

- (1) 新年講演会の開催(平成11年1月中)
- (2) 野鳥写真展の開催
光映堂フォトギャラリー(10.5.12(火)～24(日))
- (3) 『野鳥だより』の発送(112号～115号)
- (4) 定例幹事会の開催(原則として毎月第1水曜日)
- (5) 愛護会名入りカレンダーの作成
- (6) 郵送用封筒の作成

平成9年度決算書

(収入の部)

区 分	決算額(A)	予算額(B)	増 減 (A-B)	摘 要
繰越金	107,808	107,808	0	
個人費	681,500	740,000	△ 58,500	平成10年度以降の前受分を含む
家族費	109,000	60,000	49,000	家族会員の増
団 体 費	10,000	5,000	5,000	狺友会、建設維持管理センター
寄付金	3,691	10,000	△ 6,309	
参加費	60,000	55,000	5,000	講演会、藤の沢参加費
売上金	327,655	180,000	147,655	野鳥だより(前年分を含む)、カレンダー
雑収入	1,965	2,192	△ 227	利息
合 計	1,301,619	1,160,000	141,619	

(支出の部)

区 分	決算額(A)	予算額(B)	増 減 (A-B)	摘 要
印刷費	529,515	570,000	△ 40,485	野鳥だより(4回発行)
通信費	149,390	200,000	△ 50,610	野鳥だより発送費ほか
会議費	48,700	80,000	△ 31,300	幹事会等の会議室使用料
消 耗 費	12,083	40,000	△ 27,917	ネームプレートほか
交通費	65,500	70,000	△ 4,500	野鳥だより発送探鳥会交通費
報償費	77,000	90,000	△ 13,000	事務所、講師謝礼事務連絡費
雑 費	60,629	70,000	△ 9,371	傷害保険料、写真展ほか
予備費	0	40,000	△ 40,000	
合 計	942,817	1,160,000	△ 217,183	

(収支の部)

(収入) (支出) (残高)
1,301,619 - 942,817 = 358,802

内訳 会費仮受分 99,000
繰越金 259,802

(7) 傷害保険の更新

[広報]

『野鳥だより』112、113、114、115号の発行

[探鳥]

探鳥会20回

「野幌森林公園を歩きましょう」8回

[会計]

(1) 平成10年度予算(案)

[役員人事]

柳沢会長の突然のご逝去により、空席となった会長に、愛護会発足当時からお苦勞をいただいていた谷口一芳氏を選出した。また、副会長に小堀氏が留任されるとともに、戸津高保氏も新たに副会長に選任された。

幹事の洪谷弘子氏、矢野玲子氏が退任し、新たに蒲澤鉄太郎氏が幹事に就任された。その他の役員は全員留任した。

※会員数

項目	8. 4. 1	9. 4. 1	10. 4. 1
個人会員数	370名	370名	340名
家族会員数	20家族	20家族	30家族
団体会員数	1団体	1団体	2団体

平成10年度役員

会 長 谷口 一芳
 副 会 長 小堀 煌治、戸津 高保
 監 事 大野 信明、村野 紀雄
 会計幹事 大町 欽子、霜村 耕一
 代表幹事 白澤 昌彦
 幹 事
 (総務)◎中正 憲信、井上 公雄(兼)
 梶浦 孝純、早坂 泰夫、三船 幸子
 清水 朋子、蒲澤鉄太郎、渡辺紀久雄
 (探鳥)◎井上 公雄、梅木 賢俊、栗林 宏三
 竹内 強、戸津 高保(兼)、富川 徹
 富田 寿一、永島 良郎、山田 良造
 渡辺 俊夫、赤石 誠二、野坂 英三
 後藤 義民
 (広報)◎樋口 孝城、森田新一郎、伊東 裕二
 佐藤ひろみ、白澤 昌彦(兼)、武沢 和義
 道場 優、道川富美子、竹内 強(兼)
 栗林 宏三(兼)

(◎印各担当の代表者)

平成10年度予算書

(収入の部)

項目	前年度 予算額	予算額	摘 要
繰越金	107,808	259,802	会費前受分は会費に計上
個人会費	740,000	680,000	2,000×340人
家族会員	60,000	90,000	3,000×30家族
団体会費	5,000	10,000	5,000×2団体
寄付金	10,000	5,000	
参加費	55,000	60,000	新年講演会 藤の沢探鳥会ほか
売上金	180,000	180,000	野鳥だより
雑収入	2,192	5,198	利息ほか
合 計	1,160,000	1,290,000	

(支出の部)

項目	前年度 予算額	予算額	摘 要
印刷費	570,000	570,000	野鳥だより
通信費	200,000	200,000	野鳥だより発送費ほか
会議費	80,000	80,000	会館使用料・幹事会ほか
消耗品費	40,000	50,000	封筒、タックシールほか
交通費	70,000	70,000	野鳥だより発送 探鳥会幹事用等
報償費	90,000	90,000	事務所、講師謝礼ほか
雑 費	70,000	70,000	傷害保険、写真展ほか
予備費	40,000	160,000	
合 計	1,160,000	1,290,000	



探鳥会での出会いをありがとう

— 円山公園 —

10. 3. 1 西永之恵

ざらめ雪を踏みしめ探鳥会に参加させて頂きました。囀りを手がかりに姿を探し、双眼鏡を???鳥の姿を双眼鏡に取り入れられず、四苦八苦している私に井上氏は、「ヤマガラが見えているよ」と、スコープを覗かせてくださいました。

今までは記憶を頼りに、図鑑を開くのですが、似たような姿、色合いの中から「この鳥かな?」しかし、時間の経過も手伝い「そのようだけれど」と、曖昧なものになってしまうのです。

鳥の名前と目の前の鳥が初めて一つに重なる機会に「これがヤマガラですか」と、覗き込んだその世界。なんとホッとさせてくれる世界だったことでしょう。

1時間半のアツという間の探鳥会でしたが、この機会は、私に野鳥たちを介し木々が育む数えきれない命の連鎖を伝えてくれているように思えました。

歩きながら、この公園の木の歴史を語って下さる方もいらっしゃいました。

今から130年余り前、この地は焼き畑として草木全て焼き払われていたのを、初代長官が視察役人を案内するに当り、これでは余りにも辱かしいと急遽、さまざまな種類の雌雄の木々を植林させていたというのです。

そこには厳冬を幾度も乗り越えてきた木々が、春の陽光を一杯に受け、黙して立っていました。

初めての探鳥会で素敵な出会いをありがとうございました。

〒060-0005 札幌市中央区北5条西10丁目3-1

〔記録された鳥〕ハイタカ、コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、アトリ、カワラヒワ、マヒワ、シメ、ウソ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト。以上21種

〔参加者〕亀井厚子、北村方男、吉村三枝子、篠原 節、奥山2名、種川ユリ、エリス・マシューズ、早川美恵子、上月政勝、戸津高保・以知子、川村ひろみ、石井厚子、

河崎国広、中沢邦彦・園子、浦崎禮子・日枝、道場 優、村上トヨ、山本昌子、岡田一栄、高栗 勇、須田 節、浜林 勇・陽子、中本泰夫・一子、熊倉正己・雅子、松原寛直、山田良造、西永之恵、勝俣征也・由美子、蒲澤鉄太郎・則子、三船幸子、井上公雄、柏葉勝利、佐々木友子、武沢和義・佐知子、山田甚一、今泉秀吉、白澤昌彦、以上47名

〔担当幹事〕武沢和義、三船幸子

ウトナイ湖探鳥会

10. 3. 29

〔記録された鳥〕アオサギ、トビ、オジロワシ、オオワシ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、コガモ、マガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ツグミ、ハシブトガラ、シジュウカラ、オホジロ、カワラヒワ、スズメ、カケス、ハシボソガラス。以上26種

〔参加者〕岸下祥子、勝俣征也・由美子、大町欽子、山田良造、戸津高保・以知子、沢部 勝、羽田恭子、蒲澤鉄太郎・則子、田中志司子、板田孝弘、富田寿一、森田新一郎、白澤昌彦、歌代成子、樋口孝城・陽子、高栗勇、犬飼 弘、井川修二、山田甚一・玲子、村田静穂、武石篤典、道下尚美、西根昭吉・紀子、中村 愛、石田正明、北山政人、細川 巖、浅井亮太、永島良郎・トキ江、千徳よし子、永井貴志、井上公雄、 以上39名

〔担当幹事〕富田寿一、井上公雄

野幌森林公園探鳥会

10. 4. 12 安 真一郎

東京から札幌に単身赴任して早くも4年目に入りました。初めての北海道の一人暮らしで、休日を如何に有意義に過し、気分転換をして明日への活力を得るかが課題でした。幸い昔からの趣味の写真、旅行、釣り、カヌーの川下り等で北海道の素敵な自然を満喫しておりましたところ、昨年春に偶然テレビで円山公園に10年ぶりにやって来たカワセミを紹介しており、都会のこんなに身近な所で見られるのかと少し驚き、興味を持ったのがバードウォッチングに入るきっかけでした。

早速、野鳥図鑑、探鳥ガイド、鳥を撮影する為の望遠レンズを購入して円山公園をベースに道内の色々な所に鳥を求めて一人で出かける様になりました。私にとってバードウォッチングは①林や草原を歩くので運動不足解消になる。②明日は何が見られるのかと考えると楽しくなり、精神安定剤の効果がある。③当日見た鳥を図鑑で

調べたり、書いてある鳴き方と違う鳴き方を発見したりする楽しみがある。④一瞬のシャッターチャンスで写真を撮り、それをアルバムに整理してふり返る楽しみがある。⑤特定の鳥を見るために旅をする楽しみがある。という具合に、良いところだらけです。

2月にオオワシを撮影に知床に行った際に知床自然センターで入手した「北海道ウォッチングガイド」で多くの探鳥会の存在を知り、今回は野幌森林公園で野鳥を見るポイントを教えて戴こうと先週に続いての参加をしました。スタートして先ず、ヤチダモの実を食べているイスカがいますと教えて戴き、続いてシメ、ウソ、ヒガラ、ヤマガラ、カワラヒワと現れる鳥たちを観察ができました。先週は雪がまだ20~30センチ残っていてとても歩きづらく、福寿草も二ヶ所で見ることができませんでしたが、今日は道に雪も無く、陽当りの良い場所では一斉に福寿草が黄色い顔を出し、水辺ではザゼン草も姿を見せ、カエルも大合唱を始めており、僅か一週間でこんなにも様子が違ってしまうのかと、春の訪れに目を見張る程に自然の動きを実感することができました。大沢の池では枝に隠れて居場所がわからないカイツブリと遠くのキンクロハジロをスコープで覗かせて戴きました。写真に納めたのは前述のイスカ、虫を銜えるゴジュウカラ、天に向かって囀るゴジュウカラ、残雪の上の黄色いマヒワ、頭の赤がきれいなアカゲラのオス、福寿草、カエル等でした。

初めて見る鳥はいませんでした。皆さんとなごやかな雰囲気の中で楽しく時を過ごすことができました。北海道にいる間に、できるだけ多くの鳥たちに会いたいものです。

〒063-0811 札幌市西区琴似1条1丁目3-2
メゾン琴似202号

〔記録された鳥〕カイツブリ、トビ、オオタカ、オシドリ、コガモ、マガモ、キンクロハジロ、キジバト、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、カワラヒワ、マヒワ、イスカ、ウソ、カケス、ハシブトガラス、シメ。以上27種

〔参加者〕矢鳥慶子、マーク・ブラジル、大棚日出男、蒲澤鉄太郎・則子、杉野智仁・美由起、佐々木潤子、成田隼人、雪田昭治・久子、小野木弘司・幸子、こまつだいすけ、押山 昭・千恵子、本橋興七・郁子、樫田糸、西根昭吉・紀子、山中 悟・美智子、樋口孝城・陽子、霜村耕介、伊東裕二、岡田幹夫・恵子、大西尉仁、大賀浩、野坂英三、吉田慶子、横井澄子、小松仁美・亜由美、仁尾純子、長壁春夫、西永之恵、木村侑司、船越昭則、野崎莞二・加代子、館野知己、山田良造、安真一郎、鈴木繁雄・英子、山内一泰・元子、戸津高保・以知子、田

中英明、内田 孝、後藤義民、井藤崇弘、渡辺一夫、森あかね、田畑幸江、村上トヨ、中野美智子、永淵洋子、斉藤正雄、佐々木泰夫、土屋明美、国島達夫、長井節子、築山周作、小松充明、北原英幸、白川康洋、原イチ子、深田由美子、栗林宏三、井上公雄、以上76名

〔担当幹事〕栗林宏三、後藤義民

宮島沼の探鳥会に参加して

10. 4. 19 北山政人

4月19日、北海道野鳥愛護会の宮島沼での探鳥会に参加しました。この時期、日本で冬を越したマガンの多くが、この面積30ヘクタールの小さな沼に集結します。また、その他のガン類やカモ類などの水鳥達も羽を休めていきます。

この日、宮島沼に着くと、それまで雲でおおわれていた空が、徐々に青空に変わっていきました。風も思ったよりも冷たくなく、天候を心配する事もなく、鳥達を見る事に専念できます。今日は何が見られるのでしょうか。今シーズンは既に二度、宮島沼に来る事ができました。4月5日にアメリカコハクチョウ、4月11日にはマガンの群れの中にコクガンを見つける事ができました。

沼は休息中のマガン達で、びっしりと埋めつくされています。上空にも付近の水田で採食していたマガンの群れが舞い、次々と沼に帰って来ています。長年、宮島沼のガン達を調査されている草野先生によれば、マガンの数は約3万7千羽だそうです。また、群れの中には、シジュウカラガン、カリガネ、コクガンがおり、マガンと共に行動しているそうです。いずれの種類も数羽単位しかいません。シジュウカラガンとマガンの雑種もいるとのお話でした。

これだけの数のマガンから数羽しかいない他の種類のガンを見つけるのは大変です。しかし、今日は探鳥会です。参加者の皆さんと一緒に探してみると意外とすぐに見つけられます。なかなか見る事ができない鳥を見た時の感動も共に味わう事ができます。シジュウカラガン、シジュウカラガンとマガンの雑種、そして、本来なら、ごく限られた地域でしか見られないコクガンを確認する事ができました。ヒシクイも数羽、まだ残っています。さすがにカリガネは見つけるのは難しいな、と私は考えていたのですが、双眼鏡ではっきりと確認できる距離にいるのを見る事ができました。こんな近くでカリガネを観察したのは初めてなので感激しました。

最後に、私達に姿を見せてくれて、探鳥会を楽しいものにしてくれた鳥達に感謝しなければと思いました。宮島沼は確かに水鳥達の楽園です。年々、飛来する数も増えています。しかし、それを楽観できない要因がいくつ

かあります。鉛中毒の問題や、一ヶ所に集中しているため、伝染病が広まる恐れもあります。それらの問題をどうするか、考えなければいけません。

〒063-0801 札幌市西区二十四軒2条6丁目1-31
[記録された鳥] アオサギ、トビ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、ヒドリガモ、コガモ、カルガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、キジバト、ヒバリ、ヒヨドリ、モズ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、シジュウカラ、コクガン、カリガネ。以上22種

[参加者] 上田幸子、秋田和子、田辺 至、瀬見順子、久野裕之、金高早苗、原イチ子、高瀬春江、久田伸一、岡田幹夫・恵子、三船喜克・幸子、松原寛直・敏子、広川淳子、高栗 勇、小野木弘司・幸子、佐藤幸典、樋口孝城・陽子、森田新一郎、霜村耕介、屋代育夫、佐藤勇、鈴木繁雄・英子、井川修二、佐々木充人、富川 徹・明美・優・愛沙・百合香、蒲澤鉄太郎・則子、小堀煌治・慶子、加藤玉男・花子、北山政人、大町欽子、三上 勝、鈴木克司、山田良造、浜田 強、戸津高保、中正憲信、杉田範男、井上公雄、板田孝明 以上50名
[担当幹事] 山田良造、樋口孝城



【福移】平成10年7月5日(日)
札幌の中心から約12km、市の北東端に位置し、福移入口バス停付近から堤防までの農道沿いに連なる空地、灌木疎林、市内を流れる豊平川が石狩川へ注ぐ合流点付近から下流の河畔林や、堤防河川敷

草地、近の牧草地、中沼青少年キャンプ場が、この日の観察地です。バス停付近から堤防までにはアリスイ、モズ、ムクドリ、コムクドリ、カワラヒワ、カッコウ、ノゴマなど、牧草地ではノビタキ、オオジュリン、ホオアカ、コヨシキリ、河畔林川岸ではオオヨシキリ、ベニマシコ、対岸にはアオサギ、河川敷の草地ではホオアカ、対岸の土手にコロニーを営むショウドウツバメの群れが、飛び交います。堤防沿いの牧草地には、珍しいウズラの観察も期待され、ノビタキ、ホオアカ、コヨシキリ、オオジュリンなども。堤防から見下ろす河川敷は、シマアオジの貴重な繁殖地ですので観察マナーを守りましょう。

集合=8時40分 市営バス福移入口停留付近。
交通=地下鉄東豊線環状通東駅より、市営バス北札幌線福移入口下車

【鶴川】平成10年8月23日(日)
9月6日(日)

季節は夏から初秋へと変わり、主にユーラシア大陸の高緯度の極北地での繁殖活動を終え、早くも南の越冬地へ向かうシギ・チドリ類の観察のシーズンに入ります。沢沼湿地、干潟河口海岸背後草湿地が、彼らの採食適地です。鶴川もこれらの好適地が広く存在する中継地として知られています。観察される主なシギ・チドリ類は、トウネン、コチドリ、メダイチドリ、ヒバリシギ、ミユビシギ、キョウジョウシギ、ムナグロ、ダイゼン、ソリハシシギ、オオソリハシシギ、イソシギ、キアシシギ、アオアシシギ、チュウシャクシギなどで、ツバメチドリ、ウズラシギ、ツルシギ、ホウロクシギ、その他多くの種類が記録されているところです。川面や沼地の至るところにアオサギがスリムな姿態を見せ、カワセミが見られることも。コウノトリ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アマサギの記録や、チュウヒがよく見られ、オオタカ、ハヤブサ、ミサゴ、牧場、畑周辺ではヒバリ、ノビタキ、ハクセキレイ、近くにコロニーのあるショウドウツバメの乱舞、河口付近にはカモメ類が群れ、アジサシのダイビングを見られることもあります。

集合=9時30分 JR鶴川駅前。
交通=道南バス(札幌駅前バスターミナル発) 8時、浦河行き、鶴川農協前下車徒歩5分)

【野幌森林公園を歩きましょう。】
平成10年7月12日(日)、9月13日(日)
集合=9時 大沢口駐車場入口。

- ★いずれの探鳥会も余程の悪天候でない限り、行います。
- ★交通機関を利用される方は、各自でお確かめ下さい。
- ★観察用具、筆記具、昼食、雨具などを、ご持参下さい。
- ★探鳥会の問い合わせは、(011-261-5465) 自然保護協会へ。



ゴジュウカラ

[北海道野鳥愛護会] 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より) 郵便振替 02710-5-18287
☎060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465